

涅槃の考察（2）

——肇論と中国仏教（四）——

古 賀 英 彦

涅槃無名論第四（その二）

15 徴出第四

イ有名曰、夫渾元剖判、万有参分。有既有矣、不得不無。無自不無、必因於有。所以高下相傾、有無相生。此乃自然之数、数極於是。以此而觀、化母所有、理無幽顯、恢愜矯怪、無非有也。有化而無、無非無也。然則有無之境、理無不統。經云、有無二法、撰一切法。又稱三無為者、虚空、数緣尽、非数緣尽。数緣尽者、即涅槃世。

〔訓読〕

出づることを徴す

有名曰わく、夫れ渾元剖判して万有参分す。有の既に有なれば、無ならざることを得ず。無は自ら無ならず、必ず有に因ればなり。所以に高下は相い傾け、有無は相い生ず。此れ乃ち自然の数にして、数は是に極まる。此れを以てして而して觀れば、化母の育む所は、理として幽顯無く、恢愜かきと矯怪けうかいと、有に非ざるもの無し。有の化して而して無

なれば、無に非ざるもの無きなり。然らば則ち有無の境は、理として統べざるもの無し。經に云わく、有無の二法は一切法を攝す、と。又た三無為と稱する者は、虚空と数縁尽と非数縁尽となり。数縁尽なる者は即ち涅槃なり。

〔和訳〕

超出の確認

有名がいう、そもそも一氣が分化すると万有が分立する。有がすでに有であるからには、無が無でないことはありえない。無はそれ自体で無であるのではなく、必ず有を待つて無であるからである。したがって高低は相互に限定し、有無は相い待つて生じる。これこそ自然の摂理であつて、その摂理はこれを出ない。こういう視点から觀察すれば、化母の生むものは、道理として、見えにくいもの見やすいものにかかりなく、けたはずれのものとか奇怪をきわめたもののように対立するものは、有でないものはない。その有がうつろつて無になるのであるから、無でないものもないのである。

だとするならば、有無の境域は、道理としてすべておさめないものはないのである。經典にいう、有無の二法は一切法を収める、と。また三無為といわれるものは、虚空と^{ちやくめつ}摂滅と非摂滅とであるが、そのうち摂滅無為は涅槃のことである。

口 而論云、有無之表、別有妙道、妙於有無、謂之涅槃。請覈妙道之本。果若有也、雖妙非無、即入有境。果若無也、無即無差。無而無差、即入無境。總而括之、即而究之、無有異有而非無、無有異無而非有者明矣。而曰有無之外、別有妙道、非有非無、謂之涅槃。吾聞其語、未即於心也。

〔訓読〕

而も論に云わく、有無の表に、別に妙道の有無よりも妙なる有り、之を涅槃と謂う、と。請う妙道の本を覈べん。

果たして若し有ならば、妙なりと雖も無に非ず。妙なりと雖も無に非ざれば、即ち有の境に入る。果たして若し無ならば、無なることは即ち差う無し。無にして而も差うこと無くんば、即ち無の境に入る。總じて而して之を括り、即して而して之を究むれば、有に異なりて而も無に非ざるもの有ること無く、無に異なりて而も有に非ざるもの有ること無き者は明らかなり。而も有無の外に、別に妙道の有に非ず無に非ざる有り、之を涅槃と謂うと曰う。吾れ其の語を聞くも、未だ心に即せざるなり。

〔和訳〕

しかも論にいう、有無の外に、別に有無よりも玄妙な妙道があり、これを涅槃というのであると。ひとつ妙道の本源をたしかめてみよう。はたしてもし有であるならば、玄妙であつても無ではない。玄妙であつても無ではないならば、とりもなおさず有の境域に入る。はたしてもし無であるならば、無であることにまちがいない。無であつても無であることにまちがいないならば、とりもなおさず無の境域に入る。總じてこれをまとめ、即してこれをきわめるならば、有と異なつてしかも無ではないものではなく、無と異なつてしかも有ではないものはないということは明らかである。しかるに有無の外に、別に有でもなく無でもない妙道があり、これを涅槃というのであるという。私はその言葉を聞いていられるけれどもいまだ腑に落ちないのである。

16 超境第五

イ無名曰、有無之數、誠以法無不該、理無不統。然其所統、俗諦而已。經曰、眞諦何耶涅槃道是。俗諦何耶。有無法是。何則、有者有於無、無者無於有。有無所以稱有、無有所以稱無。

〔訓読〕

境を超ゆ

無名曰わく、有無の数は、誠に以んみるに法として該ねざるは無く、理として統べざるは無し。然れども其の統ぶる所は、俗諦なるのみ。經に曰わく、眞諦とは何ぞや。涅槃の道是れなり。俗諦とは何ぞや。有無の法是れなり、と。何となれば則ち、有なる者は無に有にして、無なる者は有に無なればなり。無に有なり、所以に有と稱し、有に無なり、所以に無と稱す。

〔和訳〕

境界の超出

無名がいう、まことに有無の範疇は理法としてかねおさめないものはなく、道理としてすべおさめないものはないと考えられる。しかしそのすべるものは俗諦のみである。だから經典にいう、眞諦とは何であるか。涅槃の道のことである。俗諦とは何であるか。有無の法のことである、と。なぜかという、有というものは無を待つてはじめて有なのであり、無というものは有を待つてはじめて無なのであるからである。無に対して有であるから有と呼ぶのである、有に対して無であるから無と呼ぶのである。

口然則有生於無、無生於有。離有無無、離無無有。有無相生、其猶高下相傾。有高必有下、有下必有高矣。然則有無雖殊、俱未免於有也。此乃言象之所以形、是非之所以生。豈是以統夫幽極、擬夫神道者乎。

〔訓読〕

然らば則ち有は無より生じ、無は有より生ず。有を離れて無無く、無を離れて有無し。有無は相い生ずること其れ猶お高下の相い傾くるがごとし。高有らば必ず下有り、下有らば必ず高有るなり。然らば則ち有無は殊なると雖も、俱に未だ有なることを免れず。此れ乃ち言象の形わるる所以にして、是非の生ずる所以なり。豈に是れ以て夫の幽極を統べ、夫の神道を擬る者ならんや。

〔和 訳〕

だとするならば、有は無を待つて生じ、無は有を待つて生じる。有をはなれて無はなく、無をはなれて有はない。有と無とが相い待つて生じるのは、ちょうど高低が相互に限定し合うのと同じである。高いものがあれば必ず低いものがあり、低いものがあれば必ず高いものがある。とすると有と無とは異なるけれども、ともにいまだ有であることを免れない。これこそ言語表現が起るゆえんであり、是非分別が生じるゆえんである。どうしてそれによつてあの幽玄の極致をすべおさめ、あの神秘的な作用をおしはかるものであらうか。

○神道 聖心のはたらき。本論12段参照。

ハ是以論称出有無者。良以有無之数、止乎六境之内。六境之内、非涅槃之宅、故借出以祛之。庶悖道之流、髮髻幽途、託情絕域、得意忘言、体其非有非無。豈曰有無之外、別有一有而可称哉。

〔訓 読〕

是を以て論に有無を出づと称せる者なり。良に有無の数は六境の内に止まり、六境の内は涅槃の宅なるには非ざるを以て、故に出づるを借りて以て之を祛えり。庶くは道を悖う流は、幽途を髮髻し、情を絶域に託して、得意忘言、其の有に非ず無に非ざるを体せんことを。豈に有無の外に、別に一有にして而も称す可きもの有りと曰わんや。

〔和 訳〕

こういう次第であるから、論に有無を出ているといったのである。まことに有無の範疇は六境の内にとどまり、六境の内は涅槃の居所ではないから、それ故に「出ている」の語を借りてそれを除去したのである。

願わくば道を思慕する人々は、幽途をほうふつし、心を絶域によせて、得意忘言、その有でもなく無でもないことを体得せよ。しかし有無の外に、別に一つの有と称することのできるものがあるというのではない。

○絶域 絶視聴之域（本論第2段）。

二經曰三無為者、蓋是羣生紛繞、生乎篤患。篤患之尤、莫先於有。絶有之称、莫先於無。故借無以明其非有。明其非有、非謂無也。

〔訓読〕

經に三無為を曰う者は、蓋し是れ羣生の紛繞は篤患より生ず。篤患の尤なるものは、有に先んずるは莫し。有を絶つ称は、無に先んずるは莫し。故に無を借りて以て其の有に非ざることを明らむ。其の有に非ざることを明らむは、無なりと謂うには非ず。

〔和訳〕

經典に三無為をいうのは、けだし衆生の混乱は重い病いから生じるが、重い病いの最たるものは有の先に出るものはない。有を絶つ言葉は無の先に出るものはない。したがって無の字を借りて万物が有ではないことを明らかにしているのである。しかし万物が有ではないことを明らかにすることは、万物が無であるといっているのではない。

○借無以明其非有、明其非有、非謂無也 不真空論第二の主題。とくにその12段の解説参照。

17 搜玄第六

有名曰、論自云、涅槃既不出有無、又不在有無。不在有無、則不可於有無得之矣。不出有無、則不可離有無求之矣。求之無所、便心都無。然復不無其道。其道不無、則幽途可尋。所以千聖同轍、未嘗虛返者也。其道既存、而曰不出有。必有異旨、可得聞乎。

〔訓読〕

玄なるものを搜す

有名曰わく、論自ら云わく、涅槃は既に有無を出でず、又た有無に在らず、と。有無に在らざれば、則ち有無に於いて之を得可^{うべ}からず。有無を出でざれば、則ち有無を離れて之を求む可からず。之を求むるに所無ければ、便ち應に都べて無かるべし。然れども復た其の道無からず。其の道無からざれば、則ち幽途は尋ぬ可し。千聖は轍を同じくして、未だ嘗つて虚しく返らざる所以の者なり。其の道は既に存して而も出でず在らずと曰う。必らず異旨有らん、得て聞く可きか。

〔和訳〕

玄旨の探索第六

有名がいう、論みずからいつている。涅槃は有無の外にでているのではないが、また有無の内に在るのでもない。有無の内に在るのでなければ、有無においてそれを得ることはできないであろう。有無の外にでているのでなければ、有無をはなれてそれを求めることはできないであろう。それを求める場所がないならば、一切絶無だということになるはずである。

しかしまた涅槃の道はないのではない。涅槃の道はないのではないから、幽途はたずねることができるのである。千聖が同じように通って行って、いまだかつて虚しくは返つて来なかつたゆえんのものである。涅槃の道は存在するのに、しかも有無の外に出ているのではないとも、その内に在るのでもないともいう。必ず特別な趣旨があるのである、聞くことができるであろうか。

18 妙存第七

イ無名曰、夫言由名起、名以相生、相因可相。無相無名、無名無説、無説無聞。経曰、涅槃非法非非法、無聞無説、

非心所知。吾何敢言之、而子欲聞之耶。

〔訓読〕

妙に存す

無名曰わく、夫れ言は名に由りて起こり、名は相を以て生じ、相は相とす可きものに由る。相無くんば名無く、名無くんば説くこと無く、説くこと無くんば聞くこと無し。經に曰わく、涅槃は法に非ず、非法に非ず、と。聞くこと無く、説くこと無く、心の知る所なるには非ず。吾れ何んぞ敢えて之を言わん。而も子は之を聞かんと欲するや。

〔和訳〕

玄妙な存立

無名がいう、そもそも言は名によつて起こり、名は相を待つて生じ、相は相とすることのできるものがあることによつて生じる。相がなければ名はなく、名がなければ説くことはなく、説くことがなければ聞くことはない。經典にいう、涅槃は法でもなく非法でもない。それについて聞くこともなく、説くこともなく、心の知る対象ではない。私はどうしてそれについて言うことができるか。しかるに貴方はそれについて聞こうとするのか。

口雖然、善吉有言、衆人若能以無心而受、無聽而聽者、吾当以無言言之。庶述其言、亦可以言。

〔訓読〕

然りと雖も善吉に言う有り、衆人若し能く無心を以て而して受け、無聽にして而も聴く者ならば、吾れは当に無言を以て之を言うべし、と。庶くば其の言を述べん、亦た以て言う可ければなり。

〔和訳〕

そうではあるけれども、須菩提がいつている、人々がもし無心で受けとめ、無聞で聞くなれば、私は無言でそれに

ついで語らねばならない、と。願わくばその言葉を伝えたい、やはり語ることができるのであるから。

ハ淨名曰、不離煩惱而得涅槃。天女曰、不出魔界而入仏界。然則玄道在於妙悟、妙悟在於即眞。即眞則有無齊觀。齊觀則彼已莫二。所以天地与我同根、万物与我一体。同我則非復有無、異我則乖於會通。所以不出不在而道乎其間矣。

〔訓 読〕

淨名曰わく、煩惱を離れずして而も涅槃を得、と。天女曰わく、魔界を出でずして而も仏界に入る、と。然らば則ち玄道は妙悟に在り、妙悟は即眞に在り。即眞なれば則ち有無は齊觀せらる。齊觀せらるれば則ち彼己は二莫し。所以に天地は我と同根にして、万物は我と一体なり。我に同じければ則ち復た有無なるには非ず、我に異なれば則ち會通に乖く。所以に出でず在らずして而して道は其の間に存す。

〔和 訳〕

維摩はいう、煩惱を離却しないで涅槃を得る、と。天女はいう、魔界から出ないで仏界に入る、と。

だとするならば、玄道は妙悟にかかつており、妙悟は即眞にかかつている。即眞であるから有無は等しいと見られ、等しいと見られるから彼(万物)と己(聖心)とは二ではない。したがって天地は我と同根であり、万物は我と一体である。しかし我と同体であるときには有無の手がかりをなくし、我と別体であるときには和合して貫通する本義にそむく。したがって、有無の外に出ているのでもなく、有無の内在在るのでもなく、涅槃の道はその中間に存立しているのである。

○玄道 菩提涅槃のこと。

○即眞 即偽即眞(不眞空論9段)に同じ。

○會通 聖心虚徹、妙絶常境、感無不応、會

無普通(劉遺民書問附・答劉遺民書23ハ)

即偽即眞という考えは肇論の基調をなす。万物は聖心（一気）の変化したものであるから虚偽の存在である。しかし聖心の変化であるかぎり眞実の現われにはかならない。このように眞実の現われとして見るとき、万物は個別性を没して、皆な等しくなる。すなわち斉観される。有無もまた斉観されるのである。

不眞空論第二13段に「有無称異、其致一也（有と無とは呼び名は異なるけれども、その極致は一つなのである）」といわれていた。このように有無斉観されないならば、「有無は殊なると雖も、俱に未だ有なることを免れず」（本論16口段）。したがって俗諦に属する。「眞諦とは何ぞや。涅槃の道是れなり。俗諦とは何ぞや。有無の法是れなり」（本論16イ段）で、眞諦と俗諦とが分裂したまま妙悟は成り立たない。しかし有無は斉観された。「だから經典にいう、眞諦と俗諦とはちがいがあろうか。答えていう、ちがいはない、と」（不眞空論12段）。

そのとき万物と我（聖心）とは別ではない。しかし同体であるときには有無の手がかりを失い、別体であるときには会通する聖心の本義を傷う。そこで涅槃の道は、万物の内にも外にも在るのではないというのである。

二何則、夫至人虚心冥照、理無不統。懷六合於胸中而靈鑒有余。鏡万有於方寸而其神常虚。至能拔玄根於未始、即羣動以静心。恬淡淵默、妙契自然。所以処有有、居無不無。居無不無、故不無於無。処有有、故不有於有。故能不有有無而不在有無者也。

〔訓読〕

何となれば則ち、至人は虚心にして冥照し、理として統べざるは無し。六合を胸中に懷きて而して靈鑒に余り有り。万有を方寸に鏡して而して其の神は常に虚し。能く玄根を未始に抜き、羣動に即して以て心を静め、恬淡淵黙にして妙に自然に契うに至る。所以に有に処りて有ならず、無に居りて無ならず。無に居りて無ならず、故に無に無とせられず。有に処りて有ならず、故に有に有とせられず。故に能く有無を出でずして而も有無に在らざる者なり。

〔和 訳〕

なぜならば、そもそも至人は虚心で人知れず照鑑し、道理としてすべおさめないものはない。宇宙を胸中に包んでいながら靈鑑には余りがあり、万有を方寸に映していながら精神は常に虚しい。そこで玄道の根を無始時に抜きあげ、群動に即しながら心静かであり、恬淡淵黙で玄妙に自然にかなうことができるのである。だから有に処しても有ではなく、無に居ても無ではない。無に居ても無ではない、故に無に無とされない。有に処しても有ではない、故に有にとされない。故に有無の外に出ているのでもなく、有無の内に在るのでもないものであることができる。

本然則法無有無之相、聖無有無之知。聖無有無之知、則無心於内。法無有無之相、則無數於外。於外無數、於内無心、彼此寂滅、物我冥一、怕爾無朕、乃曰涅槃。涅槃若此、図度絶矣。豈容可責之於有無之内、又可徴之有無之外耶。

〔訓 読〕

然らば則ち法には有無の相無く、聖には有無の知無し。聖には有無の知無ければ、則ち内に無心なり。法には有無の相無ければ、則ち外に無數なり。外に於いて無數にして、内に於いて無心なれば、彼此は寂滅し、物我は冥一し、怕爾として無朕なる、乃ち涅槃と曰う。涅槃は此くの若し、図度は絶えたり。豈に之を有無の内に責む可く、又た之を有無の外に徴む可きことを容れんや。

〔和 訳〕

だとするならば、万法には有無の相がなく、聖人には有無の分別がない。聖人には有無の分別がないから、内において無心である。万法には有無の相がないから、外において無相である。外において無相であり、内において無心であるから、彼此の別は寂滅し、万物と我とはびたり一如となり、ひっそりとしてきざすものとなない、そこをこそ涅槃というのである。

涅槃とはこのようなものであつて、推し量りようのないものである。どうしてそれを有無の内に求めたり、また有無の外に求めたりすることができるであらうか。

19 難差第八

有名曰、涅槃既絶図度之域、則超六境之外。不出不在而玄道独存、斯則窮理尽性、究竟之道、妙一無差、理其然矣。而放光云、三乘之道、皆因無為而有差別。仏言、我昔為菩薩時、名曰儒童。於然燈仏所、已入涅槃。儒童菩薩、時於七住、初獲無生忍、進修三位。若涅槃一也、則不応有三。如其有三、則非究竟。究竟之道而有升降之殊。衆經異説、何以取中耶。

〔訓読〕

差を難ず

有名曰わく、涅槃は既に図度の域と絶てば、則ち六境の外に超ゆ。出でず在らずして而して玄道は独存す。斯れ則ち理を窮め性を尽くす、究竟の道なれば、妙に一にして差う無きこと、理として其れ然らん。而も放光に云わく、三乗の道は皆な無為に因りて而も差別有り、と。仏言わく、我は昔し菩薩た為りし時、名づけて儒童と曰えり。然燈仏所に於いて已に涅槃に入りたり、と。儒童菩薩は時に七住に於いて初めて無生忍を獲て、進みて三位を修したり。若し涅槃は一ならば、則ち応に三有るべからず。如し其れ三有らば則ち究竟なるには非ず。究竟の道にして而も升降の殊なり有り。衆經の異説は、何を以て中を取るや。

〔和訳〕

差等の論難

有名がいう、涅槃がすでに推量できる領域と隔絶しているからには、六境の外に超出していることにならう。有無

の外に出ているのでもなく、有無の内に在るのでもなく、玄道は独存するという。これは理を窮め性を尽くした究極の道であるから、玄妙に単一であつて等差のないことは道理としてそうであらう。

ところが放光經にいう、三乗の道は皆な無為によりながらしかも區別がある、と。仏はいう、私がむかし菩薩だったとき、儒童という名であつたが、然燈仏のところですでに涅槃に入つた、と。しかるに儒童菩薩はその時七地において初めて無生忍を得て、進んで三地を修習したのである。もし涅槃が単一であるならば、三乗があるはずがない。もしも三段階があるならば究極ではない。究極の道でありながら高低の差があることになる。諸經の異説はどのような中庸を取るのか。

○窮理尽性 惠達肇論疏上に「窮理尽性なる者は、万物の理を窮め、心の神性を尽くすなり」(正統蔵一五〇)という。六朝仏教界の合言葉であつた。「のちに宋学の旗幟となつた窮理尽性の言葉がすでに北朝の仏徒によって強調されているのは興味深い。」(森三樹三郎『六朝士大夫の精神』一三五頁)

20 辯差第九

イ無名曰、然、究竟之道、理無差也。法華經云、第一大道無有兩正。吾以方便、為怠慢者、於一乘道、分別說三。三車出火宅、即其事也。以俱出生死、同稱無為。所乘不一、故有三名、統其會歸、一而已矣。

〔訓讀〕

差を辯ず

無名曰わく、然り、究竟の道は理として差うこと無し。法華經に云わく、第一大道には兩つの正しきもの有ること無し。吾は方便を以て、怠慢なる者の為に、一乘道に於いて分別して三なりと説けり、と。三車の火宅を出づること即ち其の事なり。俱に生死を出づるを以て、故に同じく無為と称す。乗る所は一ならず、故に三名有り。其れを統べ

て会帰せしむれば一なるのみ。

〔和訳〕

差等の弁明

無名がいう、そのとおり、究極の道には道理として等差はない。法華經にいう、第一大道には二つの正道があるわけではない。私は方便として、怠慢な人々のために、一乗道において三乗を分けて説いたまでである、と。三車によつて火宅を出たというのがその事にほかならない。ともに生死を出離したから同じく無為と称するのであるが、乗るところの車が一種ではないから三名があるのである。それを統一してもとに帰せば一つのみである。

口而難云、三乗之道皆因無為而有差別。此以人三、三於無為、非無為有三也。故放光云、涅槃有差別耶。答曰、無差別。但如来結習都尽、声聞結習不尽耳。請以近喩、以況遠旨。如人斬木、去尺無尺、去寸無寸。修短於尺寸、不在無也。夫以羣生万端、識根不一、智鑒有淺深、德行有厚薄。所以俱之彼岸而升降不同。彼岸豈異、異自我耳。然則衆經殊辯、其致不乖。

〔訓読〕

而も難じて云わく、三乗の道は皆な無為に因つて而して差別有り、と。此れ人の三なるを以て無為に三なるにして、無為に三有るには非ざるなり。故に放光に云わく、涅槃に差別有りや。答えて曰わく、差別無し。但だ如来は結習都べて尽き、声聞は結習尽きざるのみ、と。

請う近喩を以てして、以て遠旨を況えん。人の木を斬るが如き、尺を去れば尺無く、寸を去れば寸無し。修短は尺寸に在りて、無には在らざるなり。

夫れ羣生は万端にして識根は一ならず、智鑒に浅深有り、德行に厚薄有るを以て、所以に俱に彼岸に之くも而も升

降して同じからず。彼岸豈に異ならんや、異なることは我よりするのみ。然らば衆經の殊辯は其の致は乖かざるなり。

〔和訳〕

しかるに論難していう、三乗の道は皆な無為によりながらしかも區別がある、と。これは人に三種類あるから無為とのかかわりにおいて三といわれるのであって、無為に三種類あるのではない。だから放光經にいう、涅槃に區別があるか。答えていう、區別はない。ただ如来は結習がすべて尽きているが、声聞は結習が尽きていないだけのことだ、と。

ひとつ手近な例で深遠な宗旨をたとえてみよう。人が木を切る場合、一尺を切り去れば一尺なくなり、一寸を切り去れば一寸なくなる。長短は尺寸の問題であつて、無にはかかわりがないようなものである。

そもそも衆生は種々雑多で、才識や機根は一つではない。智慧には浅深があり、徳行には厚薄がある。だから一緒に彼岸に行ったとしても高低が同じではないのである。彼岸にちがいがあるのではない、ちがいは人から来るのである。だとするならば、諸經の異なつた説も、その意味するところはかけちがうものではない。

21 責異第十

有名曰、俱出火宅、則無患一也。同出生死、則無為一也。而云彼岸無異、異自我耳。彼岸則無為岸也、我則体無為者也。請問我与無為、為一為異。若我即無為、無為亦即我。不得言無為無異、異自我也。若我異無為、我則非無為。無為自無為、我自常有為。冥会之致、又滯而不通。然則我与無為、一亦無三、異亦無三。三乘之名、何由而生也。

〔訓読〕

異を責む

有名曰わく、俱に火宅を出づれば則ち無患なること一なり。同に生死を出づれば則ち無為なること一なり。而も彼

岸には異なること無く、異なることは我よりするのみと云う。彼岸は則ち無為の岸なり、我は則ち無為を体する者なり。請問す、我は無為と為た^は一なりや為た異なりや。若し我は即ち無為ならば、無為も亦た即ち我なり。無為には異なること無く、異なることは我よりすと言うことを得ず。若し我の無為に異ならば、我は則ち無為なるには非ざらん。無為は自ら無為にして、我は自ら常に有為ならん。冥会の致は又た滞りて而して通ぜざらん。然らば則ち我は無為と一なるも亦た三無く、異なるも亦た三無からん。三乗の名は何に由りて而して生ずるや。

〔和訳〕

一 異の審問

有名がいう、ともに火宅を出たのであるから患いのないのは同一である。ともに生死を出たのであるから無為であるのは同一である。しかるに、彼岸にちがいはあるのではない、ちがいは人から来るのであるという。おうかがいたい、人は無為といたい一つであるのかそれとも異なっているのであるか。もし人がとりもおさず無為であるならば、無為もまたとりもおさず人である。無為にはちがいはない、ちがいは人から来るのだということは許されない。

もし人が無為と異なるならば、人は無為ではないことになる。無為はもっぱら無為であり、人はもっぱら常に有為であろう。となると両者がびたりと相い契う路はどこおつて通じないことになる。だとするならば、人が無為と一つであつても三乗はないことになる、異なつていても三乗はないことになる。三乗の名は何によつて生じるか。

「若我即無為、無為亦即我、不得言無為無異、異自我也」であるから「人が無為と一つであつても三乗はないことになり」、「冥会之致、又滞而不通」つまり「無異を体する者」は一切いなくなるから「異なつていても三乗はないことになろう」。つまりいかなる乗も成り立たなくなるといのである。

22 会異第十一

イ無名曰、夫止此而此、適彼而彼。所以同於得者、得亦得之。同於失者、失亦失之。我適無異、我即無異。無異雖一、何乖不一耶。譬猶三鳥出網、同適無患之域、無患雖同、而鳥鳥各異。不可以鳥鳥各異、謂無患亦異。又不可以無患既一、而一於衆鳥也。然則鳥即無患、無患即鳥。無患豈異、異自鳥耳。

〔訓 読〕

異を会す

無名曰わく、夫れ此に止まらば而ち此にして、彼に適かば而ち彼なり。所以に得に同ずる者は、得も亦た之を得とし、失に同ずる者は、失も亦た之を失とす。我の無為に適かば、我は則ち無為なり。無為は一なりと雖も、何ぞ一ならざるに乖かん。譬えば猶お三鳥の網を出でて、同に無患の域に適くがごとし。無患なることは同じなりと雖も而も鳥鳥は各おの異なる。鳥鳥の各おの異なるを以て、無患なることも亦た異なると謂う可からず。又た無患なること既に一なるを以て而ち衆鳥を一とす可からざるなり。然らば則ち鳥は即ち無患にして、無患は即ち鳥なり。無患なること豈に異ならんや、異なることは鳥よりするのみ。

〔和 訳〕

一異の解釈

無名がいう、そもそも此にとどまれば此となり、彼にゆけば彼となる。だから得に同和するものは、得もやはり同和するものを受け容れ、失に同和するものは、失もやはり同和するものを受け容れる。人が無為におもむけば、人は無為のものである。無為は一であるけれども、どうして人は一ではないことにそむこうか。

たとえば三鳥が網を出て、ともに患いのない世界へゆくようなものである。患いのないことは同じであるけれども、鳥たちはそれぞれ異なる。鳥たちがそれぞれ異なるからといって、患いのないこともまた異なるとすることはできな

いし、また患いのないことが一であるからといって、鳥たちを一とすることはできない。だとするならば、鳥こそ患いのないことそのものであり、患いのないことこそ鳥そのものである。ならば患いのないことにちがいはない、ちがいは鳥たちから来るのである。

口如是三乘衆生俱越妄想之樊、同適無為之境。無為雖同而乘乘各異。不可以乘乘各異、謂無為亦異。又不可以無為既一而一於三乘也。然則我即無為、無為則我。無為豈異、異自我耳。所以無患雖同而升虚有遠近。無為雖一而幽鑒有淺深。無為即乘也、乘即無為也。此非我異無為、以未尽無為、故有三耳。

〔訓読〕

是くの如く三乗の衆生は俱に妄想の樊を越え、同に無為の境に適く。無為なることは同じなりと雖も、而も乗乗各おの異なる。乗乗各おの異なるを以て、無為も亦た異なると謂う可からず。又た無為なること既に一にして而も三乗を一にす可からず。然らば即ち我は即ち無為にして、無為は即ち我なり。無為なること豈に異ならんや、異なることは我よりするのみ。所以に無患なることは同じなりと雖も、而も升虚するに遠近有り、無為なることは一なりと雖も、而も幽鑒するに浅深有。無為は即ち乘なり、乗は即ち無為なり。此れ我の無為に異なるには非ず。未だ無為を尽くさざるを以て、故に三有るのみ。

〔和訳〕

このように三乗の衆生はともに妄想のかこいを超えて、ともに無為の世界にゆくのである。無為であるのは同じであるけれども、乗り物がそれぞれがう。乗り物がそれぞれがうからといって、無為であることもまたちがうとすることはできない。また無為であることが一であるからといって、三乗を一くくりにすることはできない。だとするならば、人こそ無為にはかならず、無為こそ人にほかならないが、無為にちがいはない、ちがいは人から来るのであ

る。

だから患いのないのは同じであるけれども、登る高みに高低があり、無為であるのは一つであるけれども、見とおしに浅深がある。無為こそ乗にほかならず、乗こそ無為にほかならない。つまり人は無為と異なるのではないが、未だ無為を尽くさないから三乗があるのである。

23 詰漸第十二

有名曰、万累滋彰、本於妄想。妄想既祛、則万累都息。二乗得尽智、菩薩得無生智。是時妄想都尽、結縛永除。結縛既除、則心無為。心既無為、理無余翳。經曰、是諸聖智不相違背、不出不在、其实俱空。又曰、無為大道、平等不二。既曰無二、則不容心異。不体則已、体応窮微。而曰体而未尽、是所未悟也。

〔訓読〕

漸を詰る

有名曰わく、万累の滋^あます彰^あるは、妄想に本づく。妄想既に祛^はるれば、則ち万累は都べて息む。二乗は尽智を得、菩薩は無生智を得。是の時妄想は都べて尽き、結縛は永く除く。結縛既に除けば則ち心は無為なり。心は既に無為なれば理として余翳無し。經に曰わく、是の諸聖の智は相違背せず、出でず在らずして、其の実は俱に空なり、と。又た曰わく、無為の大道は平等不二なり、と。既に無二なりと曰えば則ち心の異なることを容れず。体せざれば則ち已むも、体すれば心に微を窮むべし。而も体して而も未だ尽くさずと曰う、是れ未だ悟らざる所なり。

〔和訳〕

階漸の難詰

有名がいう、万累がますますじゃまをするのは妄想に本づいている。妄想がのぞかれたならば万累はすべて止むの

である。二乗は尽智を得、菩薩は無生智を得るが、この時、妄想はすべて尽き、結縛は永久に除去されるのである。結縛が除去されているから心は無為である。心が無為であるからには、道理として残ったかぎりはないはずである。經典にいう、この諸聖の智はたがいに背離しない。有無の外に出ているのでもなく、内に在るのでもなく、その実体はともに空である、と。またいう、無為の大道は平等不二である、と。すでに無二であるというのであるから、心が異なるはずがない。体得していないのであればそれまでだが、体得しているならば微を窮めているはずである。なに体得しているけれども未だ尽くしていないという、いまだ釈然としないところである。

24 明漸第十三

イ無明曰、無為無二、則已然矣。結是重惑、可謂頓尽、亦所未喻。經曰、三箭中的、三獸渡河、中渡無異而有淺深之殊者、為力不同故也。三乘衆生俱濟緣起之津。同鑒四諦之的。絶偽即眞、同升無為。然則所乘不一者、亦以智力不同故也。

〔訓読〕

漸を明らかにむ

無名曰わく、無為の無二なることは則ち已に然り。結は是れ重惑なり、頓に尽くすと謂う可きこと、亦た未だ喻らざる所なり。經に曰わく、三箭的に中り、三獸は河を渡る、と。中ると渡るとに異なること無きも而も淺深の殊なり有る者は、力の同じからざるが為の故なり。

三乗の衆生は俱に緣起の津を濟り、共に四諦の的を鑒る。偽を絶ちて眞に即し、共に無為に升る。然らば則ち乗る所の一ならざる者は、亦た智力の同じからざるを以ての故なり。

〔和訳〕

階漸の弁明

無名がいう、無為が無二であることはたしかにそうである。しかし煩惱は重惑である、とみに尽くすということができるといふのもやはり釈然としないところである。經典にいう、三箭が的に当り、三獸が河を渡る、と。当ることと渡ることとはちがいはないが、しかし深浅の別があるのは、力が同じではないためである。

三乗の衆生はともに縁起のわたしをわたり、ともに四諦のまをみる。虚偽を絶つて眞実に即し、ともに無為にのぼる。だとするならば、乗り物が一つでないのはやはり智力が同じではないせいである。

○絶偽即眞 肇論の本来の立場は「即偽即眞」である。不真空論9段および本論18ハ段参照。

口夫羣有雖衆、然其量有涯。正使智猶身子、辯若滿願、窮才極慮、莫窮其畔。況乎虚無之数、重玄之域、其道無涯、欲之頓尽耶。書不云乎、為学者日益、為道者日損。為道者、為於無為者也。為於無為而曰日損。此豈頓得之謂。要損之又損之、以至於無損耳。經喻螢日、智用可知矣。

〔訓読〕

夫れ羣有は衆しと雖も、然れども其の量に涯有り。正使^{たと}い智は猶お身子のごとく、辯は滿願の若くなるも、才を窮め慮を極むるも、其の畔を窮むること莫し。況んや虚無の数、重玄の域は其の道に涯無きに、之を頓みに尽さんと欲するにおいておや。

書に云わざるか、学を為す者は日に益す。道を為す者は日に損す、と。道を為す者は、無為に為す者なり。無為に為して而も日に損すと曰う。此れ豈に頓得の謂いならんや。要らず之を損して又た之を損し、以て損すること無きに至るのみ。經は螢日に喩う、智用は知る可し。

〔和訳〕

そもそも万有は多いけれども、しかしその量にはかぎりがある。ただしたとい智慧は舍利弗のようであり、弁舌は富楼那のようであつて、その才能をきわめ思慮をきわめても、そのかぎりをうかがい知ることではない。いわんや虚無の世界、重玄の領域はその道にかぎりがない、それとみに尽くそうとするときにはなおさらである。

老子にいうではないか、学問のときには日々にまして行き、修道のときには日々にへらして行く、と。修道のときというのは無為を修めるときということである。無為を修めてしかも日々にへらすという。これはとみに体得するということではない。かならずへらしてまたへらし、その結果、へらすということのないところに到達するのである。經典に螢火と日光のたとえがあるように、二乗と菩薩との智用のちがいははつきりしているのである。

25 譏動第十四

有名曰、経称法身已上、入無為境。心不可以智知、形不可以象測。体絶陰入、心智寂滅。而復云進修三位、積德弥広。夫進修本於好尚、積德生於涉求。好尚則取捨情現、涉求則損益交陳。既以取捨為心、損益為体。而曰体絶陰入、心智寂滅。此文乖致殊而会之一人。無異指南為北、以曉迷夫。

〔訓読〕

動を譏る

有名曰わく、經に稱すらく、法身已上は無為の境に入る。心は智を以て知る可からず、形は象を以て測る可からず。体は陰入を絶し、心智は寂滅す、と。而も復た云わく、進んで三位を修め、德を積むこと弥いよ広し、と。夫れ進みて修むことは好尚に本づき、德を積むことは涉求より生ず。好尚のときは則ち取捨の情現われ、涉求のときは則ち損益交も陳ぬ。既に取捨を以て心と為し、損益をば体と為し、而も体は陰入を絶し、心智は寂滅すと曰う。此れ文は乖き致は殊なりて而も之を一人に会む。南を指して北と為し、以て迷夫を曉らしめんとするに異なること無し。

〔和訳〕

運動の詰問

有名がいう、經典にいう、法身の菩薩以上は無為の境に入り、心は智によって知ることはできないし、身は形によって測ることはできない。身体は陰入を絶ち、心智は寂滅しているのである、と。しかもまたいう、進んで三位を修め、徳を積むこといよいよ広大である、と。

そもそも進んで修めるということはたつとぶことに本づき、徳を積むということはもとめることから生じる。たつとべば取捨の情があらわれ、もとめれば損益がこもこもならぶ。すでに取捨を心智とし、損益を身体としていながら、しかも身体は陰入を絶ち、心智は寂滅しているという。これは文章はかけちがい趣意はことなつていながら、しかも同一人物に当てはめようとするものである。南をゆびさして北だといって、迷つた者に道を教えるのと異ならない。

26 動寂第十五

イ無名曰、經稱聖人無為而無所不為。無為、故雖動而常寂。無所不為、故雖寂而常動。雖寂而常動、故物莫能一、雖動而常寂、故物莫能二。物莫能二、故逾動逾寂。物莫能一、故逾寂逾動。所以為即無為、無為即為。動寂雖殊、而莫之可異也。

〔訓読〕

動にして寂

無名曰わく、經に稱すらく、聖人は無為にして而も為さざる所無し、と。無為なり、故に動くとも雖も而も常に寂かなり。為さざる所無し、故に寂かなりと雖も而も常に動く。寂かなりと雖も而も常に動く、故に物は能く一なること莫し。動くとも雖も而も常に寂かなり、故に物は能く二なること莫し。物は能く二なること莫し、故に逾いよ動きて逾

いよ寂かなり。物は能く一なること莫し、故に逾いよ寂かにして逾いよ動く。所以に為は即ち無為にして、無為は即ち為なり。動寂は殊なると雖も而も之を異とす可き莫し。

〔和訳〕

動寂の相即

無名がいう、經典にいう、聖人は無為でありながら、しかも為さないことはない、と。無為である、故に動いていても常に静止している。為さないことはない、故に静止していても常に動いている。静止していても常に動いている、故に物は単一であることはできない。動いていても常に静止している、故に物は複数であることはできない。物は複数であることはできない、故に動けば動くほどよいよ静止している。物は単一であることはできない、故に静止すればするほどよいよ動いている。したがって為すことは為さないことにほかならず、為さないことは為すことにはかならない。運動と静止とはちがうけれども、しかしそれをちがうとすることはできないのである。

口道行云、心亦不有、亦不無。不有者、不若有心之有。不無者、不若無心之無。何者、有心則衆庶是也。無心則太虚是也。衆庶止於妄想、太虚絶於靈照。豈可止於妄想、絶於靈照、標其神道而語聖心者乎。

〔訓読〕

道行に云わく、心は亦た有ならず、亦た無ならず、と。有ならざる者は、有心の有の若からざるなり。無ならざる者は、無心の無の若からざるなり。何とならば、有心なるときは則ち衆庶是れなり。無心なるときは則ち太虚是れなり。衆庶は妄想に止まり、太虚は靈照を絶つ。豈に妄想に止まり、靈照を絶ちて、其の神道を標し、而して聖心を語る可き者ならんや。

〔和訳〕

道行般若經にいう、心は有でもなく無でもない、と。有ではないというのは、有心のものの有のようではなく、無ではないというのは、無心のものの無のようではないということである。なぜならば、有心のものというのは衆生がそれであり、無心のものというのは虚空がそれだからである。衆生は妄想の分別に止まり、虚空は靈妙な照鑑に欠けている。どうして妄想の分別に止まり、靈妙な照鑑に欠けるものによって、あの神秘的作用を表示して聖心を語ることができようか。

○神道 本論12へ段参照。

ハ是以聖心不有、不可謂之無、聖心不無、不可謂之有。不有故心想都滅、不無故理無不契。理無不契、故万德斯弘。心想都滅、故功成非我。所以応化無方、未嘗有為、寂然不動、未嘗不為。經曰、心無所行、無所不行、信矣。

〔訓読〕

是を以て聖心は有ならざるも、之を無なりと謂う可からず。聖心は無ならざるも、之を有なりと謂う可からず。有ならざるが故に心想はすべて滅し、無ならざるが故に、理として契わざる無し。理として契わざる無し、故に万德斯^三に弘し。心想はすべて滅す、故に功成りて我には非ず。所以に応化は無方にして、未だ嘗つて為すこと有らず。寂然として不動にして、未だ嘗つて為さずんばあらず。經に曰わく、心に行う所無くして行わざる所無し、と。信なるかな。

〔和訳〕

このような次第であるから、聖心は有ではないけれども、それを無であることはできない。聖心は無ではないけれども、それを有であることはできない。妄想としては有ではないから心想はすべて滅している。靈照としては無ではないから、道理として契合しないものはない。道理として契合しないものはない、故に万物に應ずる力

は廣大である。心想はすべて滅している、故に功が成つても我執はない。したがって応化は無方でありながら、いまだかつて為したことはない。寂然として不動でありながら、いまだかつて為さなかったことはない。經典にいう、心に行うところはないけれども、行わなかったことはない、と。まことである。

二儒僮曰、昔我於無數劫、国財身命、施人無數、以妄想心施、非為施也。今以無生心、五華施仏、始名施耳。又空行菩薩入空解脫門、方言今是行時、非為證時。然則心弥虚、行弥広。終日行、不乖於無行者也。

〔訓読〕

儒僮曰わく、昔し我は無數劫に於いて、国財身命、人に施すこと無數なるも、妄想心を以て施せるは施と為すには非ず。今は無生心を以て五華をば仏に施す、始めて施と名づくるのみ、と。又た空行菩薩は空解脫門に入りて方またに言えり、今は是れ行ずる時にして、證する時と為すには非ず、と。然らば則ち心は弥いよ虚しくして行うことは弥いよ広く、終日行いて行うこと無きに乖かざる者なり。

〔和訳〕

儒僮菩薩はいう、昔し私は無數劫のあいだ、国財身命を人に施すこと無數であつたが、妄想心で施したのだから布施ではない。いまは無生心で五華を仏に施したから、やっと布施したといえる、と。また空行菩薩は空解脫門に入つていった、いまは行う時であつて、證する時ではない、と。だとするならば、心が虚しくなればなるほど行いはますます廣大になり、ひねもす行つても行うことがないことにそむかないものなのだ。

亦是以賢劫称無捨之檀、成具美不為之為。禪典唱無緣之慈、思益演不知之知。聖旨幽玄、殊文同辯。豈可以有為便有為、無為便無為哉。菩薩住尽不尽平等法門、不尽有為、不住無為、即其事也。而以南北為喻、非領會之唱。

〔訓 読〕

是を以て賢劫は無捨の檀を称え、成具は不為の為を美め、禪典は無縁の慈を唱え、思益は不知の知を演べたり。聖旨は幽玄にして、殊文は同に辯ず。豈に以て有為は便ち有為にして、無為は便ち無為なる可けんや。菩薩は尽不尽平等の法門に住す。有為を尽くさず、無為に住せざること即ち其の事なり。而も南北を以て喩と為すは、殊に領会するものの唱なるには非ず。

〔和 訳〕

そこで賢劫経は無捨の施をたたえ、成具経は不為の為をほめ、禪経は無縁の慈をとえ、思益経は不知の知をのべたのである。聖旨は幽玄であつて、殊文がともに弁じている。どうして有為はそのまま有為であり、無為はそのまま無為であることができるか。菩薩は尽不尽平等の法門に住するという。有為を尽くさず、無為に住しないというのがつまりそのことである。しかるに南北のとりちがえをたとえにするとは、まったく解った人のいうことではない。

27 窮源第十六

有名曰、非衆生、無以御三乗。非三乗、無以成涅槃。然必先有衆生、後有涅槃。是即涅槃有始、有始必有終。而經云、涅槃無始無終、湛若虛空。則涅槃先有、非復學而後成者也。

〔訓 読〕

源を窮む

有名曰わく、衆生に非ずんば以て三乗を御する無く、三乗に非ずんば以て涅槃を成ずる無し。然らば必ず先に衆生有りて後に涅槃有り。是ならば則ち涅槃には始め有り、始め有らば必ず終り有り。而も經に云わく、涅槃には始めも

無く終りも無く、湛たること虚空の若し、と。則ち涅槃は先に有り、復た學びて而して後に成る者には非ざるなり。

〔和訳〕

起源の追求

有名がいう、衆生がいなければ三乗に乗るものはいないし、三乗がなければ涅槃を成就するものはない。そうすると必ず先に衆生がいて、後に涅槃があることになる。だとすると涅槃には始めがあるのであり、始めがあれば必ず終りがあるのである。しかるに經典にいう、涅槃には始めもなく終りもなく、湛然不動であること虚空のようである、と。とすれば涅槃は先にあるものであつて、修行して後に成就するものではないことになる。

28 通古第十七

イ無名曰、夫至人空洞無象、而万物無非我。会万物以成己者、其唯聖人乎。何則非理不聖、非聖不理、理而成聖者、聖不異理也。故天帝曰、般若当於何求。善吉曰、不可於色中求、亦不可離色中求。又曰、見緣起為見法、見法為見仏。斯則物我不異之效也。

〔訓読〕

古を通ず

無名曰わく、夫れ至人は空洞無象にして而も万物は我に非ざるは無し。万物と会して以て己と成す者は、其れ唯だ聖人のみなるか。何となれば則ち理に非ずんば聖ならず、聖に非ずんば理ならず。理にして而も聖と成る者は聖にして理と異ならず。故に天帝曰わく、般若は当に何に於いてか求めん。善吉曰わく、色中に於いて求む可からず、亦た色中より離れて求む可からず、と。又た曰わく、縁起を見るものは法を見ると為す。法を見るものは仏を見ると為す、と。斯れ則ち物と我との異ならざるの效なり。

〔和訳〕

古今の通貫

無名がいう、そもそも至人は空洞であつて無相である。しかも万物は我でないものはない。万物と和合して己を形成する者はじつに聖人のみであろうか。なぜならば、万物の理にしたがうのでなければ聖智ではない。聖智でなければ万物の理にしたがうことはない。理にしたがいながら聖智を成就する者は、その聖智は万物の理と異ならない。

だから天帝がいう、般若はいつたどこで求めましょうか。善吉がいう、色中において求めることはできないし、色中をはなれて求めることもできない、と。

またいう、縁起を見るものは法を見、法を見るものは仏を見る、と。

これは万物と我とが異なることのしるしである。

口所以至人戢玄機於未兆、藏冥運於即化、總六合以鏡心、一去來以成体。古今通、始終同。窮本極末、莫之与二。浩然太均、乃曰涅槃。

〔訓読〕

所以に至人は玄機を未兆に戢め、冥運を即化に藏す。六合を總べて以て心に鏡し、去來を一として以て体を成す。古今に通じ、始終に同じ。本を窮め末を極め、之と与に二なること莫し。浩然として太均なれば、乃ち涅槃と曰う。

〔和訳〕

したがって至人は、玄妙なはたらきを万物の兆す以前にかくし、とらえにくいごきを万物そのものにかくす。天地四方をすべて心鏡に映し、過去未來をひとつにして身体を形成する。古今に通貫し、始終同一である。本をきわめ末をきわめて万物と二であることはない。限りなく平等一如であるから、そこで涅槃というのである。

ハ経曰、不離諸法而得涅槃。又曰、諸法無辺、故菩提無辺。以知涅槃之道存於妙契、妙契之致本乎冥一。然則物不異我、我不異物。物我玄会、帰乎無極。進之弗先、退之弗後。豈容終始於其間哉。天女曰、耆年解脱亦何如久。

〔訓読〕

經に曰わく、諸法を離れずして而して涅槃を得、と。又た曰わく、諸法は無辺なり、故に菩提は無辺なり、と。以て知る、涅槃の道は妙契に存し、妙契の致は冥一に本づくことを。然らば則ち物は我に異ならず、我は物に異ならず。物と我と玄会して無極に帰す。之を進むるも先んぜず、之を退くるも後れず。豈に終始を其の間に容れんや。天女曰わく、耆年の解脱は亦た久しきに何如ぞ、と。

〔和訳〕

經典にいう、諸法を離却しないで涅槃を得る、と。またいう、諸法は無限であるから菩提は無限である、と。そこで涅槃の道が、万物と聖心とが玄妙に契合しているところに存在し、その契合の成り立つのは、万物と聖心とがびたり一如であることに本づくことが解る。だとするならば、万物は我と異ならず、我は万物と異ならない。万物と我とは玄妙に和合しつつ、無極にかえるのである。万物を進ませようとしても先になることはなく、万物を退かせようとしても後になることはない。その間に終始をいれようがないのである。維摩經の天女がいう、ご老人の解脱はどのようになに久しい時間が経ったのですか（時間のかかりようはありません）、と。

○涅槃之道 寂滅不動の聖心のはたらき。本論12へ段「神道」の注参照。 ○冥一 本論18ホ段参照。宋儒のいわゆる「体

用一原、顕微無間」の意。不眞空論16段の解説参照。 ○無極 無限定。

29 考得第十八

有名曰、經云、衆生之性、極於五陰之内。又云、得涅槃者、五陰都尽、譬猶灯滅。然則衆生之性頓尽於五陰之内、

涅槃之道獨建於三有之外。邈然殊域、非復衆生得涅槃也。果若有得、則衆生之性不止於五陰。必若止於五陰、則五陰不都尽。五陰若都尽、誰復得涅槃耶。

〔訓読〕

得することを考う

有名曰わく、經に云わく、衆生の性は五陰の内に極まる、と。又た云わく、涅槃を得る者は五陰は都べて尽くること、譬えば猶お灯の滅するがごとし、と。然らば則ち衆生の性は頓に五陰の内に尽き、涅槃の道は独り三有の外に建つ。邈然として域を殊にし、復た衆生の涅槃を得るには非ざるなり。果たして若し得ること有らば、則ち衆生の性は五陰に止まらざらん。必ず若し五陰に止まらば、則ち五陰は都べては尽きざらん。五陰若し都べて尽きなば、誰か復た涅槃を得んや。

〔和訳〕

獲得の考察

有名がいう、經典にいう、衆生の存在は五陰の内にかぎられている、と。またいう、涅槃を得た者は、五陰がすべて尽きることあたかも灯火が滅するようである、と。だとするならば、衆生の存在は頓に五陰の内に尽き、涅槃の道は独り三有の外に立つ。はるかに遠く領域がかけはなれているから、衆生が涅槃を得ることはあるまい。果たしてもし得ることがあるならば、衆生の存在は五陰には止まらないであろう。しかし必ずもし五陰に止まるのならば、五陰はまったく尽きてしまうのではないであろう。五陰がもしまったく尽きてしまったならば、いったい誰が涅槃を得るのか。

イ無名曰、夫眞由離起、偽因著生。著故有得、離故無名。是以則眞者同眞、法偽者同偽、子以有得為得、故求於有得耳。吾以無得為得、故得在於無得也。

〔訓読〕

玄に得す

無名曰わく、夫れ眞は離に由りて起り、偽は著に因りて生ず。著するが故に得ること有り、離するが故に名づること無し。是を以て眞に則る者は眞に同じ、偽に法る者は偽に同ず。子は得ること有るを以て得ると為す、故に得ること有るに求む。吾は得ること無きを以て得ると為す、故に得ることは得ること無きに在り。

〔和訳〕

玄妙な獲得

無名がいう、そもそも眞實は相を離却することによつて起り、虚偽は相に執著することによつて生じる。相に執著するから得ることがあり、相を離却するから名のあるものはない。こういう次第であるから、眞實にならう者は眞實に同化し、虚偽にならう者は虚偽に同化するのである。貴方は得るものがあることを得ることだとする、故にそれを得るものがあることにおいて求めようとするのである。しかし私は得るものがないことを得ることだとする、故にそれを得ることは得るものがないことにおいてあるのである。

口且談論之作、必先定基本。既論涅槃、不可離涅槃而語涅槃也。若即涅槃以興言、誰獨非涅槃而欲得之耶。何者、夫涅槃之道、妙尽常数、融冶二儀、蕩滌万有。均天人、同一異。内視不己見、返聴不我聞。未嘗有得、未嘗無得。

〔訓読〕

且つ談論の作るときは必ず先ず其の本を定む。既に涅槃を論ずれば、涅槃を離れて而して涅槃を語る可からず。若

し涅槃に即して以て言を興さば、誰か独り涅槃に非ずして而も之を得んと欲せんや。何とならば、夫れ涅槃の道は、妙に常数を尽くす。二儀を融治し、万有を蕩滌す。天人も均しくし、一異を同じくす。内に視るも己を見ず、聴くことを返すも我を聞かず。未だ嘗つて得ること有らずして、未だ嘗つて得ること無からず。

〔和訳〕

かつまた談論が生じるときには、必ずまずその原則を定めるものである。涅槃を論じるときは、涅槃とは無關係に涅槃について語つてはならない。もし涅槃に即して立言するならば、いったい誰が涅槃していなくてそれを得ようとするのか。なぜならば、そもそも涅槃の道というのは、玄妙に常識の範疇を根絶しているのである。天地を融合し、万有を一掃し、天人を等しとし、一異を等しとする。内にかえりみても己を見ないし、聴き耳をかえしても我を聞くことはない。そこにはいまだかつて得ることが有ったことはないし、いまだかつて得ることが無かつたこともないのである。

ハ経曰、涅槃非衆生、亦不異衆生。維摩詰言、若弥勒得滅度者、一切衆生亦当滅度。所以者何。一切衆生本性常滅、不復更滅。此明滅度在於無滅者也。

〔訓読〕

経に曰わく、涅槃は衆生に非ず、亦た衆生に異ならず、と。維摩詰言わく、若し弥勒の滅度を得れば、一切衆生も亦た当に滅度すべし。所以の者は何ぞ。一切衆生は本性として常に滅し、復た更に滅せざればなり、と。此れ滅度は滅すること無きに在ることを明らかにする者なり。

〔和訳〕

經典にいう、涅槃は衆生ではないが、衆生と異なるのではない、と。維摩詰がいう、もし弥勒が滅度を得るならば、

一切衆生もまた滅度するはずである。ゆえんは何か。一切衆生は本性的に常に滅度しており、あらためて滅度することはないからである、と。これは滅度が滅度することのないところにおいて在ることを、明らかにしているのである。

二然則衆生非衆生、誰為得之者。涅槃非涅槃、誰為可得者。放光云、菩提従有得耶。答曰、不也。従無得也。答曰、不也。従有無得耶。答曰、不也。離有無得耶。答曰、不也。然則都無得耶。答曰、不也。是義云何。答曰、無所得故為得也。是故得無所得也。無所得謂之得者、誰独不然耶。

〔訓 読〕

然らば即ち衆生は衆生に非ず、誰か^は為た之を得る者なるぞ。涅槃は涅槃に非ず、誰か為た得らる可き者なるぞ。放光に云わく、菩提は有よりして得るや。答えて曰わく、不なり。無よりし得るや。答えて曰わく、不なり。有無よりして得るや。答えて曰わく、不なり。有無を離れて得るや。答えて曰わく、不なり。然らば即ち都べて得ること無きや。答えて曰わく、不なり。是の義は云何ん。答えて曰わく、得る所無きが故に得と為すなり、と。是の故に得ることとは得る所無きなり。得る所無きをば之を得と謂わば、誰か独り然らざらん。

〔和 訳〕

そうすると、衆生が衆生でないならば、いったい誰がそれを得るのか。涅槃が涅槃でないならば、いったい何が得られるのか。

放光般若經にいう、菩提は有から得るのか。答えていう、そうではない。無から得るのか。答えていう、そうではない。有無から得るのか。答えていう、そうではない。有無とは無關係に得るのか。答えていう、そうではない。ではまったく得ることはないのか。答えていう、そうではない。その意味はどういうことか。答えていう、得るものがないから得るといふのだ、と。

したがって得るとは得るものがないということである。得るものがないということを得るといふのであるから、いったい誰か得ていないものがあるうか。

亦然則玄道在於絕域、故不得以得之。妙智存乎物外、故不知以知之。大象隱於無形、故不見以見之。大音匿於希聲、故不聞以聞之。故能囊括終古、導達羣方。亭毒蒼生、疏而不漏。汪哉洋哉、何莫由之哉。

〔訓読〕

然らば則ち玄道は絶域に在り、故に不得にして以て之を得、妙智は物外に存す、故に不知にして以て之を知る。大象は無形に隠る、故に不見にして以て之を見、大音は希聲に匿る、故に不聞にして以て之を聞く。故に能く終古を囊括し、羣方を導達す。蒼生を亭毒し、疏にして而も漏らさず。汪たるかな洋たるかな、何か之に由ること莫からんや。

〔和訳〕

そうであるならば、玄道は視聽を超絶した領域に存在する、故に不得によってそれを得、妙智は万物の外に存在する、故に不知によってそれを知る。大象は形のないものにかくれている、故に不見によってそれを見、大音は声のないものにひそんでいる、故に不聞によってそれを聞くのである。したがって久遠の時間をつつみこみ、あらゆる方面にゆきわたり、衆生を化育して、網の目はあらいようでももらすことはない。深く広くきわまりない、これに由来しないなものがあるうか。

へ故梵志曰、吾聞仏道、厥義弘深。汪洋無涯、靡不成就、靡不度生。然則三乘之路開、眞偽之途辯、賢聖之道存、無名之致顯矣。

〔訓読〕

故に梵志曰わく、吾は仏道を聞くに、厥の義は弘く深く、汪洋として涯^{かぎ}り無く、成就せざるは靡^なく、度生せざるは靡^なし、と。然らば則ち三乗の路は開け、眞偽の途は辯じ、賢聖の道は存し、無名の致は顕われたり。

〔和訳〕

だから梵志はいう、私は仏道について聞いたが、そのはたらきは弘く深く、汪洋として限りがない。成就しないものとしてなく、済度しないものはない、と。だとするならば、三乗の行く路は開かれ、眞偽の道筋は弁ぜられ、賢聖の進む道は保存され、涅槃が無名である道理は明らかになっている。

以上で肇論全篇の訳注を了る。各篇の掲載誌は左の通り。

- 宗本義・物不遷論第一 (肇論と中国仏教(一)) 花園大学文学部研究紀要38号)
- 不真空論第二 (空思想の中国的変容——肇論と中国仏教(二)——) 禅学研究85号)
- 般若無知論第三 (肇論と中国仏教(三)) 花園大学文学部研究紀要39号)
- 劉遺民書問附・答劉遺民書 (無知の知論攷——肇論と中国仏教(三)附——) 禅文化研究所紀要29号)
- 涅槃無名論第四 (涅槃の考察(1)(2)——肇論と中国仏教(四)——) 禅学研究86・87号)